

三次元宇宙のためのインターフェイスエネルギー理論 (1)

・・・三次元宇宙に色彩をもたらし、タイムワープへの可能性を秘める。

藪根一正

トーラスクラウド研究所

当研究所報告書 No.3¹⁾で述べたように、観察される Energy X¹⁾ (以下 Ex) は、高次元時空に存在し、陽電荷をもっていると推測され、中性子と合わさり原子核を作っている可能性が高いが、Ex は写真の中(図 1 参照)でさまざまな色をもって表れている。

同じ陽電荷をもつ Ex どうしは斥力が働くと思われる。さらに Ex がお互いに衝突せず、安定した状態で存在するためには、絶縁物質が仲介して存在していることも疑われる。図 1 の中で黒く映っているところには、発光するものは存在していないと思われるが、その黒い部分に「見えない絶縁物質」(Invisible Insulation) の存在が推定される。

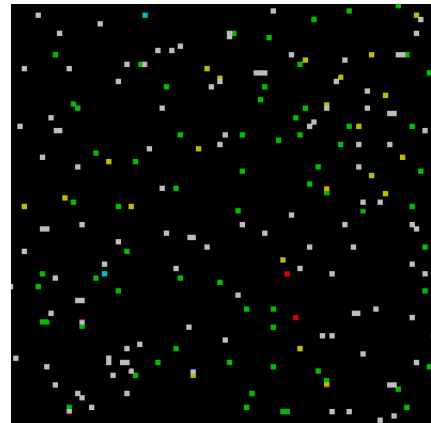


図 1.3/36, 2013 撮影(Nikon D800E)

また、絶縁物質だけの中を電荷が高速で移動しつつ、必要なところで反応するのは不可能と思われるので、電荷の通り道には安定した電気伝導率の高い触媒が存在している可能性を考え、その触媒を高次元時空のプラチナ(Platinum in the higher dimension)と呼ぶことにする。

高次元時空は、思いが表現され、三次元空間の設計図となりうる場所である。そこでは、どこまでも大きく思い描くことも出来るし、どこまでも小さく思い描くことも出来るが、そのどこへ行くにも、まったく時間を要さない。つまり、三次元空間的な時間、距離の観念が存在しないと思われる。そしてその思いが高次元時空で表現されたものが Ex と思われる。

初版発行 2013年4月13日

Email: yabune_kazumasa@toruscloud.com

〒540-0012 大阪府中央区谷町 1-3-11-503

トーラスクラウド研究所 ホームページ: <http://toruscloud.com/>

高次元時空のどこにでも一瞬で表現されることになる陽電荷 E_x のエネルギーはどう計算されるのだろうか？そのエネルギーの強さを E とすると、 E は時間、距離に依存せず、一定条件下で

$$E=h'N$$

h' : 定数

N : 陽電荷の振動回数

と、エネルギーが振動回数の関数として規定される可能性がある。

E_x は様々な色をもって三次元空間から観察されるので、三次元空間から見た E_x の周波数は様々な値をとりうると思われる。すると、周波数から時間の要素を取り除いた高次元空間での振動回数 N も様々な値をとりうると思われる。振動回数 N が大きくなることで、 E が大きくなり、そこにエネルギーが蓄積されることになると考えられ、振動回数 N が無限大に大きくなると、エネルギーも無限大になるとと思われる。

すると観察された E_x は、可視光線の範囲内であるが、可視光線以外のものも存在する可能性も否定できない。実際に観察される色は、赤、青、緑の光の三原色が多く、これら光の3原色が加法混合すると黄色、シアン、マゼンタ、白色の光になり、さらにあらゆる種類の色の光になって、三次元空間からも観測できるようになっている可能性が考えられる。

そして、 E_x にエネルギーが十分に蓄積され、次の三次元インターフェイスのための準備、つまり三次元ホログラムを作るための準備がそろると、次の三次元ブレーンが現れることになるとと思われる。

この発光しながら振動を重ねていく、まるで光の泡のような集合体が、人の思いと一体となって空間に配列されるその奇跡的な瞬間～それが、プラチナのように輝き続ける光の世界であり、美しい三次元ブレーンの創造の瞬間なのではないかと考える。

そして私たちがインターフェイスする三次元ホログラムの世界はどの程度の広がりをもつのだろうか。私たちが、一度に見たり感じたりすることのできる範囲は限られている。家の中の一室で過ごすとき、月や星の表面を詳細に示したホログラムは現れないが、自分の体や部屋の調度品は詳細なものが必要になる。ヘンリー・マークラム博士が指摘されるように、「私たちの知覚の泡は 38 万キロメートルも広がらない」²⁾ので、私たちがいる瞬間に必要なホログラ

ムはそれほど大きなものにはならないと思われる。ホログラムを作り出すために大量のエネルギーが必要と考えられることから、無駄なものがない自然の摂理をみる思いである。

そして、私たちの住むこの三次元空間には、山や川といった皆で共有しているホログラムと、各個人の異なるホログラムが存在していると思われる。そのため、同じものを見ているときでも、意識の持ち方でホログラムがどれだけ詳細に現れるかは各個人で異なるが、同じ意識を共有して同じものを見たときは同じホログラムが現れることになるのではないか。さらにホログラムの変化に目を向けたとき、ホログラムが変化するために私たちが動く必要のないことに気づかされる。すると、私たちが旅行するとき、私たちは実際には全く動いていず、周りの風景がホログラムとして動いていて、私たちは単にホログラムの中心に常に意識をおかされている存在なのかもしれない。まるで、コペルニクスの唱えた地動説から天動説の時代に逆行するような感もある。

最後に、近い将来タイムマシンやワープマシンというものが作り出されれば、今まで述べてきた理論から考えると、そのマシンは次のようなものになると推定される。

私たちがマシンに座りスイッチをいれると、光の泡に囲まれるが、自分は全く変化することもなく、動くこともない。しかし、自分の周囲のホログラムがどんどん変化していき、最初いた時空とは全く異なる時空にインターフェイスしている自分に気づくことになる。

参考文献

1) 当研究所報告書 No.3 「ATLAS のデータと当研究所のデータの比較 (2) … Energy X の発見」

http://toruscloud.com/document/T.C.I.report_0003.pdf

2) Henry Markram, A brain in a supercomputer, TEDGlobal 2009

http://www.ted.com/talks/lang/ja/henry_markram_supercomputing_the_brain_s_secrets.html